

八郎湖流域管理研究第1号の発刊にあたって

八郎潟干拓の開始から50年、大潟村の開村から40年、2007年12月、八郎湖は全国11番目の指定湖沼となり、水質問題が発現する湖として、ついに公認された。

その干拓は、第二次大戦後の復興過程で、はじめ食糧増産、のちに農業近代化を旗印に国家プロジェクトとして強力に推進された。結果、1万5千ha余の中央干拓地を生み出したが、干拓堤防と防潮堤が建設されたため、かつての汽水の潟湖、八郎潟は、海と遮断され、湖面5分の1ほどの淡水湖、八郎潟調整池すなわち八郎湖に縮小された。

八郎潟流域は90,800haとさほど広くない。これは今も昔も変わらない。だが、その流域は、半世紀の間に様相を一変させた。干拓によって、最下流域の大潟村に500戸余りの15ha平均の専業的水田農村を誕生させ、化石エネルギーに依存した近代的農業技術と生活様式が深く浸透した。一方、八郎湖に流れ入る20ばかりの中小河川流域には中山間の水田地帯が多く、小規模な兼業地帯とはいえ、化石エネルギー依存の農業技術と生活の浸透は最下流域と大差ない。周りの山地における林業も、半世紀前までは地域経済の支柱の一つであったが、長年の不振により山村の暮らしや地域資源の循環利用を支える力を弱めてきた。

八郎湖の水質改善の課題に応えていくには、水質汚濁やアオコの発生などの実態を解明することや問題となる事態を打開できる方法とは何か、まず、問われる。だが、それを真に有効なものにするには、具体的には何を、どこまで、誰が実行すればよいかを問い続けていく必要がある。水質問題の解決は、流域住民の生活と活動に深く関わり、ときにその変更まで要求するのであるから、私たちは、それに相応しい形で包括的に流域の生活や自然環境を幾層かの問題状況として捉え、それらへの対応を組み合わせ実践しては見直し、見直しては実践していくという順応的管理の長期的な構えで事に当たる必要がある。

そこで私たちは、この際、八郎湖流域管理研究会を結成し、同流域の問題解明や管理水準の向上に有益な研究や取り組みの成果を集めるとともに、差し迫った課題や決してゆるがせにできない課題についてシンポジウムを開いて、問題の解明や打開方策の深化に努めていくこととした。第1回は、「八郎湖の水質改善と地域資源の循環利用をめざした新たな取り組み」をテーマにシンポジウムを開催する。国土技術政策総合研究所河川環境研究室の天野邦彦室長はじめ多くの方々のご協力に深く感謝申し上げます。また、これを契機に八郎湖流域に関わる研究成果や資料を幅広く集積していくため、機関誌として『八郎湖流域管理研究』を発刊していくこととした。関係の皆様には、格段のご理解とご協力を、切にお願い申し上げます。

秋田県立大学生物資源科学部長

佐藤 了